北方工业大学日本语言文化论丛

日本语言文化论文集

高靖 主编

商大学出版社

万工业大学日本语言文化论丛

日本语言文化论文集

高 靖 主编

浙江工商大学出版社

图书在版编目（CIP）数据

日本语言文化论文集 / 高靖主编. — 杭州 : 浙江工商大学出版社, 2015.4

ISBN 978-7-5178-0674-5

Ⅰ. ①日… Ⅱ. ①高… Ⅲ. ①日语—语言学—文集 Ⅳ. ①H36-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2014）第 233733 号

日本语言文化论文集

高 靖 主编

责任编辑 罗丁瑞
封面设计 王妤驰
责任印制 包建辉
责任校对 孙立春
出版发行 浙江工商大学出版社
（杭州市教工路 198 号 邮政编码 310012）
（E-mail: zjgsupress@163.com）
（网址: http://www.zjgsupress.com）
电话: 0571-88904970,88831806（传真）
排　　版 杭州雅萦斋文化创意有限公司
印　　刷 虎彩印艺股份有限公司
开　　本 710mm×1000mm 1/16
印　　张 14.25
字　　数 200 千
版 印 次 2015 年 4 月第 1 版 2015 年 4 月第 1 次印刷
书　　号 ISBN 978-7-5178-0674-5
定　　价 32.00 元

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江工商大学出版社营销部邮购电话 0571-88904970

前　言

近年来，在高等教育大众化和国际化的大环境下，我国高校的日语专业教育迎来蓬勃发展的同时，也面临着深化专业结构调整、强化教学改革、大力推进学术建设等诸多问题。北方工业大学日语专业在学校和学院的领导下，在全体教师和学生的积极参与下，也大力开展教学改革、课程建设、学术建设等重要工作，全面贯彻“以学生为中心，提高教育教学质量”的办学理念。

北方工业大学日语专业成立于 1985 年，是国内理工科院校中较早开办日语本科专业的院校之一，迄今已为国家培养 1000 多名毕业生，目前日语专业在校生约 150 多名。多年来我校日语专业把“合作、奉献、拼搏、钻研”作为一种文化精神来建设，强调拥有精神共识既能凝聚团队力量，又能提高团队战斗力、实现可持续发展。

我们十分重视专业建设和课程建设，根据社会需求设置了经贸日语和日语口译两个专业方向，以专业基础扎实、实践能力强、注重跨文化交际为专业特色，以全程“班导师 + 学业导师”这一精细化教育体系为培养模式，致力于实现高素质应用型人才的培养理念。为学生开设了“基础日语、日语写作、日语视听说、日语翻译、日本文学、日本概况、经贸日语”等专业课程，以及“日本商务礼仪”“日本文化体验”“日本动漫文化”等特色课程。

我们十分重视专业实践教学，在硬件建设方面，我们拥有舒适优雅的专业教室、设备先进的“同声传译教室”和“影视节目制作编辑系统”及特色鲜明的“日本文化体验教室”和丰富的学习资源。不仅利用小学期开展日本语言文化方面的实践活动，而且每年还积极组织学生申报“大学生科技活动项目”和“大学生科学研究与创业行动计划项目”，其项目成果多次获奖。

我们十分重视师资队伍建设和学术建设，本专业现有教师 13 名，其中

博士学位教师6名，高级职称教师4名，并常年聘请日籍专家2名，专职教师均来自北京大学、北京外国语大学、广东外语外贸大学、日本大阪大学等著名学府。经过多年积累和发展，我们在日本语言和文学研究方面均已形成鲜明特色和优势，在日本文学研究与翻译，特别是和歌、俳句研究方面特色鲜明。出版文学方面专著《日本俳句史》《日本民族诗歌史》《和歌美学》《野间宏文学研究》等；译著有《源氏物语》《大江健三郎精品集》等。在语言研究与教材编写方面扎实推进，出版了专著《日语中的非对等比较句研究》《现代汉语双及物构式的认知语言学研究》《汉日动词谓语类非限制性定语从句对比研究》《日中动词比较研究》《新编日语本科论文写作指导》等，并在国内外相关刊物发表多篇论文，申报完成省部级课题等多项科研项目。我校现为中国日本文学研究会副会长单位和中国国际商务日语教学研究会常务理事单位。

我们十分重视日语语言文学学科硕士点建设，一贯重视国际化教育，与日本关西外国语大学等多所国外院校开展合作，不仅每年都有几十名日本留学生来我校学习汉语，而且每年都选拔多名学生作为交换生、学历生赴日学习一年或两年，每年都推荐优秀本科生免试攻读国内外高校研究生。国际化的学习平台拓展了学生发展空间和成才途径。

此次编辑出版北方工业大学的《日本语言文化论文集》，得到了我校各级领导的大力支持，同时也得到了我校日语系广大教师、研究生、本科生的积极响应，论文内容涉及到了日本语言、文学、社会、文化及日语教育等方面，论文作者既有教师，也有我校日语专业研究生和本科生，既有教师科研项目的阶段性成果，也有学生科技活动项目的阶段性成果。该论文集的出版，既是对我校日语专业学科建设和教学改革的成果检阅，也促进了我校日语专业的建设和发展。我们相信：通过大家的一致努力，我校日语专业必将迎来更加美好的明天。

编　者

2014年7月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目 录

前 言..... 1

1. 中国人の俳句季語に対する再認識..... 郑民钦 /1
2. 日本文化视野下禅宗的文化特征..... 王立峰 /11
3. 日语中“年轻人语言”的特征与造词法..... 赵玉婷 /20
4. 论万叶歌人山上忆良..... 闫利华 /35
5. 日语专业毕业论文写作中存在的问题与对策探讨..... 吴明伟 /43
6. 日本語のヤリモライの特殊な用法..... 高 靖 /53
7. 叱り言葉の諸相..... 郑成芹 /63
8. 文理分科与高校日语专业基础教学探究.....
..... 张 爱 王立峰 闫利华 /70
9. 初級段階における「形容動詞」の導入について..... 梁长岁 /80
10. 弥生時代観再考..... 吴明伟 /88
11. 析《茶花女》与《伊豆的舞女》的爱情悲剧.....
..... 张易潇 孙海英 /113
12. 从犬的谚语比较看中日文化..... 张 倩 孙海英 /121
13. 语境理论在基础日语教学中的应用研究..... 郑成芹 /127

14. 日本初级汉语教材中同形词的注释研究 ..... 葛　婧 /136
15. 汉语使役兼语句日译的偏误分析 .....
..... 张雅蒙　高巧兰　王亚楠 /147
16. 日本人的爱猫情结 .....
..... 李若竹　刘宇达　杨牧锦　李宜婧　查琴琴 /155
17. 论新兴日语对年轻一代的影响 ..... 钟煜辉 /164
18. 对日语敬语「五分法」的几点看法 ..... 梁长岁 /170
19. 论日语 V1—V2 复合动词的语义关系 ..... 罗　辉　孙海英 /179
20. 谈日式点心命名的文化意义 ..... 白　双 /186
21. 论年度流行语与日本的社会世态 ..... 王　莹 /196
22. 中日包含身体词汇的惯用语的认知对比研究 ..... 董志宏 /204
23. 从认知语言学角度看日语形容词「よい」的多义性
..... 张雨葳 /211

中国人の俳句季語に対する再認識

郑民钦
北方工业大学

摘　要　中国人对日本俳句的认识日渐深入，对俳句美学的研究也逐渐向深广发展，但主要注重于其内容本身及与我国古典文学的比较，对构成俳句审美机制的季语和切字的研究甚为薄弱，而且基于两国文化背景的差异所产生的不同的审美观，以中国式的传统审读方式理解俳句，甚至出现误读、偏差的现象。本文主要对季语在俳句美学中的作用进行论述，通过季语的功能特性和能动性质的剖析明确其在俳句文学中的地位，以期我国的俳句爱好者在较深层次上正确认识季语的内涵及其审美的核心作用，有助于进一步提高其对俳句这个日本特殊诗体及日本国民性、民族性的认识。

关键词　俳句；季語；美学

1. はじめに

中国人が俳句を読む際、五七五のしらべと季語を理解するにあたって、五七五のしらべより季語のほうがわかりやすいと感じる。植物、動物、天文などを含む春夏秋冬四季に関する言葉、風景、祭日、人事などが中国の風土、生活習慣と類似するところが多いので、親しみを感じ、理解しやすいように感じて、そして、よく『荆楚歳時記』『燕京歳時記』と比較する。これは、季語に対する理解の浅はか、安易さ、ひいては間違っていると思う。

四季折々の変化に富んだ大自然に大きな親しみを覚えることは、俳句の自然へのコンプレックスで、古今を貫いてきたものである。風物の季節の移り変わりに感情を融け合わせ、それによって引き起こされた心理の微妙な動きを悟らせる役目を季語に働かせるものが大きいである。

われわれ中国人は漢詩の自然風景に関する言葉への感受をもって俳諧の季語を理解するのが往々である。したがって、まず季語とはなにかと俳文学の中でどう位置づけするかを再認識する必要がある。

2. 季語と俳句の関係

季語と俳句との関係について、日本人が大自然になじむということに繋がるのは当然その一因であるが、私には、逆推論に走るのを不安に感じさせられるところがある。実作を通じて俳句における季語がさらに多くの働きを備えていることを見つけたばかりでなく、和歌、物語、連歌の中の季寄せの意識も組み入れたので、その発揮の自覚さをいっそう高揚させたのである。一定の題材と一定の季節に結びつけるという長い歴史を通じて培われてきたその規定が自由恣意なものではなく、ある一定の文学的枠にはめて把握されなければならない。

「季語」「季題」は近代になってから発明した言葉である。それ以前の連歌、俳諧はよく「四季の題」「四季の詞」「季詞」などを使っていたが、「季語」「季題」とは共通点もありながら、微妙的な区別も、違った俳句観をもつ作者の理解によってそれなりに存在していることは否定できない。季語が季の詞で、季題が季の題であるのは一般的な言い方だが、題が季で、すなわち季が主題である場合、季題が季語を包容するのである。もし発句が強い季節感を持つなら、題詠としての季題の力は季語を超えるだろう。これは芭蕉の連句の中でとりわけ目立っている。近代以後、季題を主題とする場合、季語が往々にして季題と一体となり、素材として言葉の枠を超えて、季題のシンポルとなっている。時代の下りに従って、季題が次第に主題でなくなったことにより、俳句は題詠が無主題、ないしもともと主題であるべき題詠がなくなって、ただ季節を表す言葉としての季語が残る時期となっている。従って、季題主題性を喪失した近現代俳句の季語形成体は、芭蕉時代の文学性質を受け継ぎながら、新しい時代の特色をも兼ねている。季語の使用密度がいち早く高まっているので、季題は

次第に季語に取って代わられるようになったのである。

近代の論争を経て、俳壇における地位確立を実現された無季句は、いまは社会に認められた俳句の重要な形式となっている。有季と無季とは俳壇の二大の力となっているが、はっきりと一線を画すわけでなく、有季派は無季句を作ると同じように、無季派も有季句を作ることで、お互いに受け入れあい、両立する形となっている。

全体的に安定した状態に据えながら、つねに変化的に流れているとはいえ、文明が極めて進歩している21世紀に入ってから、新しい季語の生まれは極めて少ない。その原因は、俳句が依然として古い伝統的な土に深く根を下ろしている故、伝統俳句の俳人が歴史感を強調し、現代の人間の感情が殆どすべて蕉風時代に具備されたため、新しい自然観の発見に繋がる季語を見つけるのが難しいということにあるのではないかと思う。新しい題材の発見は自然観による俳諧的本意の発見である。確かに、俳諧に対する季語の枠は、安永、天明期にほぼ完成され、その後の新しい季語の増加は分類を細かくしたり、季節と題材との結びつきの詠まれ方を変えたりするだけで、観照によっての新しい開発とは云えないだろう。従って、写生説を打ち出して、観念的な季題趣味のマンネリズムを打破しようとする明治時代の正岡子規の俳句革新運動は革命だと言えるだろう。

季語が俳諧においては約束の語である以上、作者はそれを守らなければならないので、読者としても一定の約束に従って芸術作品を理解するほかなく、その約束がなければ、完全的に芸術を享受することが不可能であるという認識を心得る必要があるのではないかと思う。俳句という短い詩形の表現容積の不足を補うと云いながら、複雑な内容を詠もうとすれば、季語の働きを有効手段として十分に尽くす前提条件が必要であるから、一定の季節と結びついている季題の確立こそ創作者と享受者との間の橋渡しになると考えられるだろう。

だが、季語に対するそれだけの理解は俳句の心を十分に汲み取ること

ができず、漢詩なりの理解の仕方で認識するのは、なかなか不十分で、理解に苦しいところも多いようである。

題材への把握をいかにうまくするかを規定することは季語の働きの一つと言えるだろう。季語の働きによって複雑な内容を詠み、その余韻を響かせることを可能にするので、まさに表現不足を補う役割を果たしている。その有名な例としては蕪村の「お手打ちの夫婦なりし変え更衣」であろう。季語の「更衣」は内容拡張において大きな役割を要請されている。ご法度にされている武家屋敷の奉公人の男女が恋に落ちて、大騒ぎにもなってしまうことで、この二人を切って捨てようという主人の処罰を止めて、許しておあげるという話のわかる奥方のおかげで、このふたりは夫婦になり、新世帯をつくった。お手打ちの騒ぎが、めでたくよい結果となり、あっという間に衣更を迎えるようになった。もっと多くの内容を小さな俳句の器に盛ろうとするには、季語の柱の役割をその例を通じて明らかになるだろう。これはその語の示す事物が何ほどか規定されるというもので、本意を持つことであるため、俳諧的文学語として素材と季節とを結びつけることにおいて約束を働かせる面で極めて重要である。

一つの季題を選んでそれぞれ句を作るのは句会の一般的プロセスだが、その季題に対する理解が違うため、対象としての直感的な把握や想像観照によって引き起こされた感動もその過程において微妙なイメージのギャップが出てくるのは当然である。

季語のもう一つの働きは季節に結びつけることである。季節を示すことから俳諧美が生まれる。俳諧の美学は一種の理念で、その理念が具体的な花鳥風月に約束された時、季語に成立された俳諧的観照という契機を通じて、作品の中で形成されたものである。

いくつかの春の句をもって、季語による俳句の美意識を考えよう。

「バスを待ち大路の春をうたがわず」（石田波郷）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春が来た。日はうららかに照り、街路樹は芽吹き、人々は軽い足取りで大路を歩いている。「大路の春」の表現は春風駘蕩の趣きが出、作者の春景色と呼吸する胸の響きが聞こえるほど高まっている。そして現代都市生活の中に古典的な連想を入れている。春以外の季節では、このような二重性の連想ができなく、ただ現代の都市平凡な風景の描写である。

「麗しき春の七曜またはじまる」（山口誓子）

この句の季感は「春麗」。大変平明な句で、「春の賛歌」そのもののようだ。「はじまる」には、春が始まることを指すばかりでなく、一年の始まりという意味も入っている。「また」というのは、作者の心の弾む期待感を膨らんでいる。これは春を復活再生の時期とする人類共通の意識に合っているので、句全体として豊かな自然とその文化を大切に守り育てていきたいというの力が強い。

「にほひある衣も畳まず春の暮」（蕪村）

「春の暮」や「春の夜」が官能性を持っている。それを「にほひある衣」に強調する。花見から帰ってきて、脱いだ服を「畳ま」ない女性の姿がいかにも肉感的で妖艶さを漂って、春の暮のけだるいような官能と重なっている。また、そこには、世俗の生活の物憂さを厭うしどけなさの情緒も混めていて、特定のないやる瀬もなさに繋がっているかもしれない。

「紺絣春月重く出でしかな」（飯田龍太）

紺絣は時代の色かもしれない。戦前の貧乏で意気盛んな学生のファッションであった。春になると冬の厚着から解放され、身も軽々としている。ふと東の空を見ると大きなお月様が浮かんでいる。春のお月様だから、冴え冴えしさよりやはり少し朧で、それだけに夜の「重さ」が生身にこたえる。春の月だけが湿り気を帯び、肌で触覚を鋭く悟られている。「紺絣」との対比で、春の月の重さ、温かさが生きている、匂いと色彩との交錯

のせいだろう。

以上の春の季語の句からでもわかるように、俳句にとって季語が根本的なもので、一つの季節にまた微妙な季感の違いがあるのはいうまでもなく当然のことである。俳句における「有季」とは、春夏秋冬のどれか一つで足りるといった形式的な約束では、けっしてなく、作者が深い感慨を表現するにあたって、ひとりでに、そして必然的にその感慨を託すべき季語が浮かび上がり、使われることになる。一句の内容がまずできあがり、そこへ規則だから季語を一つ加えるといった外面上のものではない。

季題は大自然に対する表現であり、日本の国民性から離れられないものである。人間自身が自然の一部であると見ている伝統俳句は、人間をモチーフにしても、心を歌うための「台」が必要である。その「台」は大自然で、季語がまさに人間と自然とを融けあうための「触媒」のようである。

3. 季語の美学的意義

自分の感覚で外部世界に触れ、またその感覚を言葉に変え、言い換えれば、感覚の富みを充分に生かして意識的に言葉の規範をはみ出させ、インスピレーションを爆発させた以上の句は、生活や芸術への鋭い感覚と自分の内的宇宙に起きた繊細な変化への感覚とを衝突させることにより、人生さまざまな体験や経験を表現しようとする。そこに入っているのは、命の流れの根本としての理性そのもので、主に視覚、聴覚、味覚など感覚器官から脱皮した生命の生存状態である。感覚を俳句文学の美を判断する境界線とすれば、感覚を極限に押し付ける危うさがある。

季語は文学の言葉である以上、俳句の美学を表現する上で約束がある。その約束は一定の季節の言葉として用いられるしかできず、他の季節には用いられるのが無理である。たとえば、「月」という語は、一年中月があるので、「月」を詠む場合、その前に春夏秋冬を添えて四季の違った月

の風情を表現するが、ただ「月」という一文字を使う場合、秋の月を指すわけである。また、たとえば「草花」という語は、一年中草花があるにもかかわらず、この季語を使う句は必ず秋の季節と規定されている。この制約された規定にはなにか根拠があるだろうか。これは、俳諧ひいてはそれ以前の連歌の文学意識が高まっていた時に、季語によって作品の風雅、風流の趣きが生まれることを意識的に感じているので、それを固定化した自然観となっている。季語のこうした表裏の制限はある程度の自由を束縛する文学的なマイナスの面を持っているため、芸術美、俳諧美を成立させるには、自然への体験を拘束することは避けられない。季の意識を出すための季語使用ではない。季語さえ入れば、俳句の美が自然的に出るわけではなく、文学の美に転化するわけなおさらではない。そこには、自然に対する観察の定規化、様式の硬直化、表現技法の繰り返しなどは季語に頼りすぎて句作するマンネリズムに陥る危険性がある。歳時記を拠り所にして安易に句を作ることは、確かに俳諧の大衆化を広げるが、芸術性の高い作品が生まれないだろう。

山口誓子の作品で「秋の暮水中もまた暗くなる」「秋の暮まだ眼が見えて鴉飛ぶ」がある。二句の季語はいずれも「秋の暮」である。その内容は一見して素朴で解りやすそうである。暮れかかってきた秋の日、暗くなって来た散歩道、僅かに残っていた夕陽、群がって飛んでいる鴉…季語は季節だけを示すように見えるが、実はすべての中核になっている。秋の暮になると、空が暗くなる。そればかりでなく、水をのぞきこむと、ほのかに光っているが、その中までも暗くなっている。空中と水中との比較を通じて、異質の空間にある「秋」という季節そのものも暗くなることを作者が痛感するだろう。暗くなることは一つの過程で、人間の魂が秋の暮に来ているのにつれて、暗くなって闇に消えることを象徴するように思わせる。万物枯れてしまう冬に近い暮秋は世界が暗くなり、人間運命の終結が暗くなることの暗示である。その鴉はまさに目に見えてきた死を迎える使者のようだが、人間存在の場をあくまでも求め続ける熱い

思いがその切り取った暮れのひとコマに躍動されている。鴉が飛び交い、水中が暗くなるという秋のある日の夕暮れの具象から、ある季節の完結を経て、最終的に人生の終末に繋がるという季語「秋の暮」の働きぶりは句の意味合いを広げ、深めるうえでものすごく大きな力を持っていると云わざるをえない。

詩的対象を制約する季語のこの二つの働きは、俳句をほかの文芸形式と区別する一種の独自性のある枠にはめることによってはじめて、その芸術化を保つことができるのである。俳諧文学を成立させる契機としての季語と審美の枠を規定される契機としての季語という二面性をわれわれ中国人がもっと認識しなければならないと思う。

私は、俳句の季語と切れ字が漢詩の律格に似ているが、漢詩の律格とまた違った働きを持っていると考える。内容と形式を共に重要視している俳句を理解する際、両国の文化の壁を乗り越える必要がある。両方とも詩を作る時絶対に守らなければならない鉄則である。

ただし、無季を主張する俳人達の作品の中の季語の働きは伝統俳句のとニュアンスが違っている。たとえば中塚一碧楼の「TURK のような湯場が欲しい場末の秋だ」という句だが、季語は「秋」である。俳句自身は口語自由律で、退廃的な雰囲気に満ち溢れている。この秋の夜、もし郊外にトルコ人のように官能的、妖艶的な気分で入浴できる風呂場があればなんということだろう。これは恐らく作者の青春時代の気持ちの現れであるが、当時流行っている自然主義、新ロマン主義の主流傾向とも密接に繋がっている。句は「トルコ」を片仮名でなく、わざと英語「TURK」を使い、そして五七五の定型を破り、いわゆる口語自由律の形を取っていることによって、「秋」が句の中で伝統的な季題情趣を失い、トルコ風呂と基本的に連係を無くしてしまう。伝統的意味においての季題役割としての季語はその句の中で普通の言葉と見られるようになっている。また河東碧梧桐の「炭挽く手袋の手して母よ」「牡蠣飯冷えたりいつもの細君」二句は、季語はそれぞれ「炭」と「牡蠣飯」で、いずれも冬の季語である。前句

は勤勉で働いている母親への愛を歌い、後句はそそっかしい妻を通じて夫婦間の倦怠感を表現する。テクニックを使わず、素直に語ったが、情緒から見れば、季語を作品の季題と認めず、これをもって家庭の人情味に満ちた雰囲気を見出すだけの「もの」のように見える。「古さ」への反省から生まれた主体情緒が、伝統に対する厳しく冷たい観察に帰結するため、彼らの強い懐疑は、全体的に沈鬱で激しいものであり、背景や形式ばかりでなく、外見からも内容からも、かつて纏っていた大きな翳りから目覚めた後、当然かつ必要な精神的清算として表現された。

季語を持ちながらその働きを弱体化し、季節を大自然の背景としている人間の生活の中に置くという「中途半端」なやり方もある。たとえば山口誓子の「秋風に嬰児ひとりうらがへる」の句は、赤ん坊がまだ動き　　が、自らの力で寝返りを打ったところを秋風と結びつけた。赤ん坊の健やかな成長の様子を見つめ続ける親の嬉しい気持と嬰児の不思議な意志とを裏返す塩梅は慈しみの一点に絞っていると云える。季語の「秋風」は嬰児の動作と必然的な繋がりがなく、どんな季節でも寝返りを打つことがあるので、ここでは具体の時間を指すばかりで、よって嬰児に共鳴するが、伝統俳句の中の季語ほど力を持っていない。このような句は季語より季感がほしいだけで、現代詩みたいな新鮮感をもって伝統俳句の季題趣味と異なった季感の世界を作り上げた。

季語が俳句の中核ということを認められている以上、一句には二つの季語を使うことをできるだけ避けなければならない。そうでないと、二つの中核になることによって、主題を曖昧化させるのは不可避である。しかし、実際には、二つの季語を使う作品は全然ないということではない。といっても、季語が二つあっても、その中のいずれかをもっと強調しなければならない。

芭蕉の「夏の夜や崩れて明けし冷やし物」は句会のために準備した冷やし物などが一夜過ぎて、崩れてしまったことを詠じた。これはまるで人間の美しい運命のはかなさを象徴するようだ。夏の夜の短さと営みの

むなしさとを感づいている。面白いことは、この句には「夏の夜」「明けし」「冷やし物」の三つの季題が入っているのが珍しい。

4. 結　語

いま私たち中国人が俳句に対する理解はますます深くなってきているが、これを日本文学、そして日本の民族性、国民性への認識、研究とを深く結びつけるために、もっと突っ込んで、また多視角で研究する必要があると思う。

（本文系日本住友财团日本文化研究基金资助项目《和歌俳句研究》的部分成果）

参考文献：

[1] 水原秋桜子. 日本大歳時記（5巻）[M]. 東京:講談社, 1981.
[2] 山本健吉. 身边歳時記 [M], 東京:文芸春秋, 1984.
[3] 水原秋桜子, 飯田竜太. 鷹羽狩行の世界 [M]. 東京:角川書店, 2003.
[4] 金子兜太. 金子兜太集（4巻）[M]. 東京:筑摩書房, 2002.
[5] 井本農一. 芭蕉の文学の研究 [M]. 東京:角川書店, 1978.
[6] 大野林火. 近代俳句の鑑賞と批判 [M]. 東京:明治書院, 2003.
[7] 黒田杏子. 季語の記憶 [M]. 東京:白水社, 2005.
[8] 东聖子. 蕉風俳諧における「季語・季題」の研究 [M]. 東京:明治書院, 2003.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com